良寛詩にみられる白居易詩受容について

上　芝　令　子

はじめに

良寛の漢詩については、従来より、平仄や押韻を厳守するという作詩上の基本からは逸脱した、いわば破格の作品であるという面ばかりが強調されてきた。このため、詩語や詩句にかかわる先行の諸文芸からの影響についての考究は、例えば寒山詩や杜甫詩への親炙の指摘[1]を除いては、これまで二次的・二義的であったと言わざるを得ない。

本稿では、これまで主に通釈、鑑賞に重きがおかれ、詩語についての分析は、付録的に補足、参考として行なわれるのみであった良寛詩に対して、用語や用例に着眼して調査を行い、その上で特に白居易詩の影響が明らかに感取される詩句、詩を指摘し、その具体的用例の実態について分析・検討を行う。良寛詩における白居易詩受容の一端として提示したい。

良寛詩の底本には、自筆漢詩集『草堂詩集』[2]（『墨美』第210号・第213号　昭和46年・墨美社）と『良寛書蹟大系』[3]（平成2年・教育書籍）所収の作品群を用いた。良寛詩には改案、推敲の跡が著しく、用いられた詩語、詩句を原典に従い、可能な限り忠実に把握するためである。

一、代表的作例 ―「竹」の詩（6詩）について―

まず良寛詩の代表的作例として一首掲げる。良寛の「竹」を愛好する詩として比較的よく知られた作品である。なお詩番号は渡辺秀英編『良寛詩集』（昭和49年・木耳社）の分類に拠る。（　）内には、『墨美』第210号・第213号に拠る『草堂詩集』の巻名（天・地・人）と頁数を付した。本文表記として、□は原蹟において削除を表す、文字の上に薄く丸印が付けられたものを示す。原蹟において行間に書き込まれた改案

の字句は、該当字句の右側に小字で示す。

6 宅邊有竹困（苦）　泠々（篠々）数千干　宅邊に苦竹あり　泠々数千干
笋迸全遮路　梢高斜拂天　笋は迸って全く路を遮り　梢は高くして斜に天を拂う
経霜陪精神　隔烟轉幽間　経霜精神を陪し　烟を隔てて轉た幽間
宜在松柏列　那比桃李妍　宜しく松柏の列に在るべし　那ぞ桃李の妍に比せん
竿直節彌高　心虚根愈堅　竿直にして節いよいよ高く　心虚にして根いよいよ堅し
愛爾貞清質　千秋希（庶）莫遷　愛す爾が貞清の質　千秋希わくは遷る莫れ

以下、白居易詩にみられる類似する表現、詩句、詩語、また典拠と考えられる詩句を取り上げる（白居易詩に付す○番号、傍点は筆者による）。第一句「苦竹」は「琵琶引」詩に「住近益江地低濕　黄蘆苦竹繞宅生」句（①）がみられる。第二句の改案語である「脩々」は「舟中雨夜」詩に「江雲暗悠々　江風冷修々」句（②）、「数千干」は「北窓竹石」詩に「一片瑟瑟石　数竿青々竹」句（③）、第四句の「斜拂天」という表現には「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」詩にみられる「灑砌飛泉纔有點　拂窓斜竹不成行」句（④）が類似した表現として存する。第五句の「経霜」は「題贈鄭秘書徴君石溝渓隠居」詩に「在火辨良玉　経霜識貞松」句（⑤）が、「陪精神」という表現には「奉和思黯相公以李蘇州所寄太湖石奇状絶倫因題二十韻見示兼呈夢得」詩に「精神欺竹樹　氣色壓亭臺」句（⑥）がみられる。第十句「心虚根愈堅」という表現には「池上竹下作」詩に「水能性淡為吾友　竹解心虚即我師」句（⑦）が存する。この句は『和漢朗詠集』[4]巻下・竹の部にも収められている。第十一句「愛爾貞清質」という句には「栽杉」詩に「移栽東窓前　愛爾寒不凋」句（⑧）が詠出され、類似がみとめられる。また「貞清質」という詠出には先に掲げた「題贈鄭秘書徴君石溝渓隠居」詩にみられた「経霜識貞松」句（⑨）も詠出が類似する句として考えられる。また、詩ではないが「養竹記」（『白氏文集』巻二十六）に「竹似賢、何哉。竹本固、（中略）竹性直、直以立身、君子見其性、則思中立不倚者。竹心空、空以體道、君子見其心、則思應用虚受者。竹節貞、貞以立志、君子見其節、則思砥礪名行、夷険一致者。（竹は賢に似たり。何ぞや。竹は本固し。（中略）竹は性直し。直くして以て身を立つ。君子は其の性を見て則ち思う、中立して倚らざる者を。竹は心空し。空しくして以て道を体す。君子は其の心を見て則ち思う、用に応じて虚しく受くる者を。竹は節貞し。貞しくして以て志を立つ。君子は其の節を見て則ち思う、名行を砥礪し、夷険

一致なる者を。[5]）として、古来から竹が君子に愛される所以を記した文がある。竹に「本固」「性直」「心空」「節貞」という四つの特徴をあげる。これらは中国古典詩においていずれも竹を描写する際に伝統的に用いられてきた表現であり、白居易と良寛のみに共通する表現ではない。が、その表現描写には類似する点が多い。以上、代表的に掲げたこの一詩を見ただけでも良寛と白居易の詠出する詩句、表現に類似する点が数多く存することは確認できるものである。

二、具体的分析

以下、類似する詩句の実態をみていく。類似は用語、句型、詩句という三つのレベルで分類している。用語の類似は、整理の都合上（a）共に句頭に同じ語が用いられる場合、（b）良寛詩では句頭に用いられる語が白居易詩では句中（句末）に用いられる場合、（c）良寛詩では句中（句末）に用いられる語が白居易詩では句頭に用いられる場合、（d）共に句末に同じ語が用いられる場合、（e）その他（影響が考えられる句等）として分けているが、類似は一詩において多岐にわたっており、詩句の指摘が重複する場合もある。

【1】用語の類似

（a）共に句頭に同じ語が用いられる場合

（天・一一）

24索々五合庵　實如懸磬然　索々たり五合庵　實は懸磬の如く然り

「索々」は白居易詩に多く詠出される詩語であるが「清調吟」詩・第一句の「索索風戒寒　沈沈日蔵耀」を掲げておく。

（天・一二）

29四大當不安（方）　盡日倚枕衾（寒爐深擁灰）　四大方に不安　尽日枕衾に倚る

「盡日」は「夏日」詩に「盡日坐復臥　不離一室中」句（①―1）、「詠老贈夢得」詩に「有時扶杖出　盡日閉門居」句（①―2）がみられる。特に後者の句には良寛詩の「寂々春已暮　寥々獨閉門」（9詩）との類似もみとめられる。

（天・一四）

34爐焼帯葉枝　口吟（靜）寒山詩　爐には焼く葉を帯ぶるの枝　口には吟ず寒山の詩

「口吟」は「效陶潛體詩十六首詩」其十二に「口吟歸去來頭戴漉酒巾」句がみられる。

（天・一五）

40誰能脫（脫金印）塵累　此來照心顏（蕭灑與安禪）　誰か能く金印を脱せんや　蕭灑と安禪とを

「誰能」は詩における用例の多い表現であるが、特に「移家入新宅」詩の「誰能脱放去　四散任所之」句（①－1）、「元八郎中楊十二博士」詩の「盡日観魚臨澗坐　有時随鹿上山行　誰能抛得人間事　来共騰々遇此生」（①－2）という詠出は、単純に用語の類似にとどまらない、場面・情景の共通する部分もみとめられる句である。この詩に詠出される「騰々」語は良寛詩に特徴的にみられる語のひとつであり、後に再び触れる。

（天・一六）

47老農言歸来　見我如舊知　老農言に歸り来り　我を見て舊知の如し

「見我」という表現は「夢與李七庾三十三同訪元九」詩中に二箇所、「夜夢歸長安　見我故親友」句（①－1）、「元九正獨坐　見我笑開口」句（①－2）がみられる。

（天・一六）

47陶然共一醉　不問是與非　陶然として共に一醉　問わず、是と非を

「不問」は「衰病無趣因吟所懐」詩に「合口便歸山　不問人間事」句が存する。

（入・七四）

62松柏千齢外　竟日悲風吹　松柏千齢の外　竟日、悲風吹く

「竟日」は白居易詩に多くみられる詩語であるが「聴彈古淥水」詩に「西窗竹陰下　竟日有餘情」句（①－1）、「寄張十八」詩に「經旬不出門　竟日不下堂」句（①－2）が存する。

（天・二〇）

63下有陳死人　長夜何所期　下に陳死の人有り　長夜何の期する所ぞ

「長夜」語は「微之敦詩晦叔相次長逝歸然自傷因成二絶」詩の「長夜君先去　残年我幾何」句がよく知られる。

（天・二三）

71孟冬是十月　晨起下崟岑　孟冬是れ十月　晨に起きて崟岑を下る

卉木皆摧残　溪澗寂無音　卉木は皆摧残し　溪澗寂として音無し

回首望南山　松柏被其陰　首を回らし南山を望めば　松柏其の陰に被わる

「晨起」は「早行林下」詩の首聯に「披衣未冠櫛　晨起入前林」が存する。この詩の頸聯には「傍松人稀少　隔竹鳥聲深」という詠出がみられ、詩想の点でも類似が看取される。

（天・三〇）

87窗白月始出　雨歇滴尚滋　窗は白みて月始めて出で　雨は歇み滴尚滋し

可怜箇時意　寥々只自知　怜れむべし箇の時の意　寥々として只だ自ら知るのみ

「窗白」は「和錢員外禁中夙興見示」詩の首聯に「窗、白、星漢曙　窗暖燈火餘」句（①）がみられる。「雨歇」は用例の多い詩語であるが、「楊柳枝詞八首」詩・其四の転、結句には「可、怜、雨、歇東風定　萬樹千條各自垂」（②／③）という詠出があり「可怜」語の詠出もみられる。

（天・三四）
102 一弾激江海　再弾華寒枝　一弾して江海を激ましめ　再弾して寒枝を華さかす

「一弾」は「五絃弾」詩に「一、弾一唱再三歎　曲淡節稀聲不多」句（①－1）、「北窗三友」詩に「一、弾愜中心　一詠暢四肢」句（①－2）がみられる。

（地・四七）
132 唯知来朝新迎歳　不省雙鬢化為霜　（「和天華上人歳末被貽作」詩）

唯だ知る、来朝新たに歳を迎うるに
省みず、玄鬢の化して霜と為すを

「唯知」は「閨怨詞三首」詩・其一の転、結句に「不慣経春別　唯、知到暁啼」（①）がみられるほか、二首に本詩と同様句頭に詠出される用例がみられる。第二句の「不省」は「恨詞」詩の転、結句に「従来恨人意　不、省似今朝」（②－1）、「詠懐」詩に「未嘗羨栄華　不、省労心力」句（②－2）の詠出がみられる。

（地・五〇）
141 帙散牀頭書　雨灑簾前梅　（「即事」詩）

帙は散ず牀頭の書　雨は灑ぐ簾前の梅

「雨灑」は「長安早春旅懐」詩の頷聯に「風吹新緑草芽拆雨、灑、軽黄柳條濕」がみられる。

（書陵大系・条幅一〇・他二作品）
141 帙散床上書　雨打簾前梅　帙は散ず床上の書　雨は打つ簾前の梅

「雨打」は「徴之宅残牡丹」詩の起、承句に「残紅零落無人賞　雨、打、風摧花不全」が詠出される。

（地・五二）
150 烟樹蒼々春已暮　千峯万落望欲迷　（「子規」詩）

烟樹は蒼々として春已に暮れ
千峯万壑　望迷わんと欲す

「烟樹」は「奉和思黯相公雨後林園四韻見示」詩に「煙、樹、緑含滋　水風清有味」句（①）ほか詩語としての用例は多い。「煙葉」では「和汴州令狐相公新於郡内栽竹百竿（中略）七言五韻」詩に「煙、葉、蒙篋侵夜色　風枝蕭颯欲秋声」句（②）がみられ、この句は『和漢朗詠集』巻下・竹の部にも所収される。

（地・五三）
153 遥夜地爐焼榾柮　只聞風雪打寒窓　（「寒夜」詩）

遥夜地爐に榾柮を焼く　閑に聞く、風雪の寒窓を打つを

「遥夜」は詩語として多く詠出される。「和談校書秋夜感懐呈朝中親友」詩に「遥夜涼風楚客悲　清砧繁漏月高時」句がみられる。

(地・六九)（「早秋作」詩）

187 荒村淋漓一夜雨　今朝草堂繁暑収

荒村（林間）淋漓一夜の雨　今朝草堂　繁暑収む

無窓中数削玉遠山色　一戸外片拖練長江流

窓中には玉を削る遠山の色　戸外は練を拖く長江の流

首句「荒村」は「村居臥病三首」詩・其三に「荒村百物無待此養衰瘵」句（①）、また改案の「林間」語は「送王十八歸山寄題仙遊寺」詩の頷聯に「林間煖酒焼紅葉　石上題詩掃緑苔」（②－1）がある。この句は『和漢朗詠集』巻上・秋（秋興）にも所収される。「七月一日作」詩にも「林間暑雨歇池上涼風起」（②－2）の詠出がみられる。

第三句の改案「窓中」は「楽天是月長齋鄙夫此時愁臥（中略）因以寄懐逐為聯句。所期解悶焉敢驚禅」に「舎下環流水窓中列遠岑」（楽天）句（③）がみられ、「遠山色」を詠出する良寛の句とも類似する。

(地・六九)（「早秋作」詩）

187 預理杖錫試散歩　自茲風月正悠々

預め杖錫を理めて試みに散歩せん　茲より風月正に悠々

「自茲」という表現は、「遣懐」詩に「自茲唯委命　名利心雙息」（①－1）、「遊悟眞寺」詩に「自茲捨車馬　始渉藍溪灣」句（①－2）が存する。

(地・六九)（「題藤氏別墅」詩）

188 池古魚龍仭　林静春日長　池古くして魚龍仭し　林静にして春日長し

「池古」は「和微之詩二十三首」其八「和三月三十日四十韻」詩に「池古莫耶沈　石奇羅刹踞」句（①）が詠出される。「林静」は「首夏」詩に「林静蚊未生　池静蛙未鳴」句（②）がみられる。

(地・六九)（「題藤氏別墅」詩）

188 晩歩東廂下　幽鳥復北翺　晩に歩む東廂の下　幽鳥復た北に翺る

「幽鳥」は多くの詩に詠出がみられるが、「遊悟眞寺」詩にも「幽鳥時一聲　聞之似寒蝉」句が存する。

(b) 良寛詩では句頭に用いられる語が白居易詩では句中（句末）に用いられる場合

(人・七二)
1三山坐超忽　五天望裡空　三山坐して超忽たり　五天望裡に空し

「三山」「五天」は「七老會」詩に「除卻三山五天竺人間此會且応無」句が詠出される。

(人・七六)
9筆硯長委埃　香爐更無烟　筆硯長く埃に委せ　香炉更に煙無し

「筆硯」は「自吟拙什因有所懐」詩に「未能抛筆硯　時作一篇詩」句がみられる。

(朱幅二)(「良寛詩集」未収録詩)
(未)清夜三更直牽硯　酔顔酣兮落禿毫　清夜三更直ちに硯を牽き　酔顔酣にして禿毫を落とす

「酔顔」は「潯陽宴別」詩の頸聯に「暮景牽行色　春寒散酔顔」の詠出がみられる。

(c) 良寛詩では句中（句末）に用いられる語が白居易詩では句頭に用いられる場合

(人・八二)
39誰能超世累(往来者名利来)　茲来共般桓(照心顧)　誰か能く名利を超え　茲に来たりて心顔を照らす

「名利」は「宿簡寂観」詩に「名利心既忘　市朝夢亦盡」(①－1)、「寄張十八」詩の第八、九句に「名利心遑々念茲彌懶放」(①－2)の詠出がみられる。

(天・一六)
47行々投田舍　正是桑榆時　行き行きて田舎に投ず　正に是れ桑榆の時

「桑榆」は「逸老」詩に「桑榆坐已暮　鐘漏行將曉」句がみられる。日暮れを指す外に晩年の意味として詠出されることもある。

(天・一六)
47喚婦漉濁酒　摘藜(蔬)以蒸(供)之　婦を喚び濁酒を漉し　藜を摘み以て之を蒸す

「藜」は「短歌行」詩に「布衾不周體　藜茹纔充腹」句として詠まれている。「藜(あかざ)」は質素な食事を指す場合が多い。

(天・二二)
66調入青雲高　韻和碧潭深(徹)　調は青雲に入りて高く　韻は碧潭に撤して深し

「青雲高」という表現は「和微之詩二十三首」其七に「白日上昭昭　青雲高渺々」句が存する。

(地・五四)(「観音二首」詩（其一）)
154我今歸命稽首禮　哀愍納受救世仁　我今歸命稽首して禮す　哀愍納受したまえ救世の仁

「稽首」は「賀雨」詩に「稽首再三拝　一言献天聴」句がみられる。

（地・六四）（「逢賊」詩）

174終宵孤坐幽窓下　疎雨蕭々苦竹林

終宵孤坐す幽窓の下　疎雨蕭々たり苦竹の林

「蕭々」は詩語としての用例は古詩より多くみられるが、「上陽白髪人」詩にも「耿耿残燈背壁影　蕭蕭暗雨打窓聲」句として詠出されている。この句は『和漢朗詠集』巻上・秋（秋夜）にも所収されている。

（地・六九）（「早秋作」詩）

187巖下清泉洗病耳　樹梢寒蝉吟素秋

巖下の清泉病耳を洗い　樹梢の寒蝉素秋に吟ず

「寒蝉」ひぐらしは「応酬牛相公宮城早秋寓言似見示兼呈夢得」詩に「碧樹未揺落　寒蝉始悲鳴」句の詠出がみられる。

（地・六九）（「題藤氏別墅」詩）

188池古魚龍伏　林静春日長　池古くして魚龍伏し　林静にして春日長し

「春日」も古来より多く用いられる詩語であるが、二例前の174詩「蕭々」例でも掲げた「上陽白髪人」詩に「春日遅日遅獨坐天難暮」句として詠出される。

（d）共に句末に同じ語が用いられる場合

（入・八）往来尋報回来名酒利者

39誰能超世累　茲来共般桓照心願　誰か能く世累を超え　茲に来たりて心顔を照らす

改案前の「世累」は世の中の煩いを指す。「早春西湖間遊（中略）偶成十八韻寄微之」詩に「野情遺世累　酔態任天眞」の詠出がある。

（行草書二二）（「讀永平録」詩）

221湯々皆是爲誰擧　慕古感今勞心曲

湯々皆是れ誰か爲めに擧す　古を慕い今に感じて心曲を勞す

「心曲」は心の中の一部始終、心中をいう語であり、「朱陳村」詩に「悲火燒心曲　愁霜侵鬢根」句がみられる。

（e）その他（影響が考えられる句）

（天・二二）

66調入青雲高　韻和碧潭深　調は青雲に入りて高く　韻は碧潭に撤して深し

同じ詩語を詠出する用例ではないが、用語に若干の影響が感じられる句を掲げておく。

「韻和」に類する詠出として、「崔湖州贈紅石琴薦如煥錦文無以答之以酬謝」詩に「頽錦支緑綺　韻同相感深」句がみられる。

（地・六九）（「早秋作」詩）

187 無數削玉遠山色　一片拖練長江流

無数の削玉遠山の色　一片練を拖く長江の流

「削玉」は訳出が難しい語であるがちりばめられた玉のような美しさ、として捉えるなら、「春雪」詩の「大似落鵝毛密如飄玉屑」という表現には類する詠出がみとめられる。

【留意すべき用語】

・「騰騰」

良寛詩において「騰々」語は特別な意味が付与され詠出される語と考えられる。師である国仙和尚から授けられた「印可の偈」に「騰々任運」として用いられ、図らずもその後の良寛の歩む道、生きる姿勢を導き出したともいえる語である。一義的には訳出できず、「盛んにおこるさま」「緩やかなさま」など様々な意味で用いられる語である。

良也如愚道転寛　騰々任運得誰看　為附山形爛藤杖
到処壁間午睡閑（印可の偈）

『草堂詩集』には二例詠出される。

（天・二六）
79 此時持衣鉢盂　騰々入市廛　此の時鉢盂を持ち　騰々として市廛に入る

（地・六五）（「騰々」詩）
178 裙子短兮褊衫長　騰々兀々只麽過

裙子短く褊衫長し　騰々兀々只麽に過ぐ

「騰々」語は白居易詩に多く詠出され、句頭に詠まれるものに限っても実に四例においてみることができる。「題石上人」詩に「騰々兀々在人間　貴賤賢愚盡往還」句（①－1）、「雪中晏起偶詠所懐兼呈張常侍韋庶子皇甫郎中」詩に「冉々老去過六十　騰々間来経七春」（①－2）、「自問行何遅」詩に「以此易過日　騰々何所爲」（①－3）、「代書詩一百韻寄微之」詩に「往々遊三省　騰々出九逵」句（①－4）などである。これらの類似の事例についての考察は後で総括して述べたい。

・「悠々」

（地・六九）（「早秋作」詩）
187 預理杖錫試散歩　自茲風月正悠々

預め杖錫を理めて試みに散歩せん　茲より風月正に悠々

「悠々」語も良寛詩には多く詠まれ特徴的な語といえるが白居易詩にも「贈江州李十使君員外十二韻」詩に「我本江湖上　悠々任運身」句（①－1）がみられ、この句には先に掲げた「印可の偈」の「任運」語の詠出もみられる。また「別元九後詠所懐」詩にも「悠々早秋意　生此幽閑中」（①－2）の詠出がみられる。「老熱」詩にも「悠々君不知　此味深且幽」など詠出がみられる。この事例についても「騰々」語の

考察とあわせて後で述べる。

【2】句型としての類似

句型として類似する用例も幾つか指摘することができる。以下6例掲げてみていく。

【「上有～、下有～泉」型】

(天・一五)
40長松何落々　清風萬古傳　上有千章松　蒼翠六月寒　下有湧甘泉　徹底淨無痕

上に千章の松有り　蒼翠六月寒し
下に湧甘の泉有り　徹底して淨く痕無し

(喬松何落々　清風萬古傳)
39下有龍王泉　可以洗心顔　喬松何ぞ落々たる　清風万古に伝う
(下有龍王水　徹底清無痕)
上有千年松　清風竟日傳　下に龍王の水有り　徹底して清く痕無し

「初入峽有感」詩に「上有萬仞山　下有千丈水」句として用例がみられる。

【「下有～人」型】

(入・七四)
62下有陳死人　古墓何纍々　下に陳死の人有り　古墓何ぞ累々たる

「古詩十九首」其十三（『文選』所収）に「下有陳死人」の詠出はすでにみることができるが、白居易詩にも同様の句型を三例みることができる。「翫新庭樹因詠所懷」詩に「下有無事人　竟日此幽尋」（①－1）、「酬集賢劉郎中對見寄兼懷元浙東」詩に「下有白頭人　擥衣中夜起」（①－2）、「秋日」詩に「下有獨立人　年来四十一」（①－3）として詠出がみられる。

【「宿雨～○風～」型】

(短・五五)（「托鉢」詩）
90宿雨浄道路　秋風揺六環　宿雨道路を浄め　秋風六環を揺がす

「同韓侍郎遊鄭家池吟詩小飲」詩に「宿雨洗沙塵　晴風蕩煙籟」（①－1）、「春盡日天津橋酔吟偶呈李尹侍郎」詩に「宿雨洗天津　無泥未有塵」句（①－2）の用例がみられる。

【「正是～時」型】

(天・一六)
47行々投田舍　正是桑榆時　行き行きて田舍に投ず　正に是れ桑榆の時

「白雲期」詩に「四十至五十　正是退間時」の用例が存する。

【「懐得～時」型】

(行草書二)（「讀永平録」）
221懐得疇昔在圓通時　先師提持正法眼　懐い得たり疇昔圓通に在りし

時　先師提持す正法眼

「過裴令公宅二絶句」（其一）詩に「風吹楊柳出墻枝　懐、得、同歓共酔時」句の詠出がみられる。

【「非～非～」型】

（天・三）
1吾有一張琴　非梧亦非桐　我に一張の琴有り　梧に非ず亦た桐にも非ず

（天・一四）
35非廣復非狹　非布也非絲　広きに非ず復た狭きに非ず布に非ず也た糸にも非ず

良寛詩には書蹟は未見ながら、他に二例「此月與此指　非同復非異」（243）、「堪笑今堪嘆　非俗非沙門」（320）として詠出があり、好んで用いていた表現として考えられる。一方白居易詩において、この句型の詠出は他の詩人を圧倒して多くみられ、十一例にのぼる。「夜遊西武丘寺八韻」詩に「一年十二度　非少亦非多」（①－1）、「朝回遊城南」詩に「誰辨心與跡　非行亦非藏」（①－2）、「郡亭」詩に「持此聊過日非忙亦非閑」（①－3）、「松齋自題」詩には三例みられ「非老亦非少　年過三紀餘」（①－4）、「非賤亦非貴　朝登一命初」（①－5）、「昏昏復黙黙　非智亦非愚」（①－6）である。ほか「晝臥」詩に「誰知盡日臥　非病亦非眠」（①－7）、「雲和」詩に「非琴非瑟亦非箏　撥柱推絃調未成」（①－8）、「洛陽有愚叟」詩に「點検盤中飯　非精亦非糲」（①－9）、「中隠」詩に「似出復似處　非忙亦非閑」（①－10）がみられる。また先の「騰々」語において掲げた「雪中晏起（中略）皇甫郎中」詩句の前聯にも「非賢非愚非智慧　不貴不富不賤貧」（①－11）句が詠出されている。白居易詩におけるこの事例についてはすでに川合康三氏によって「韓愈と白居易―対立と融和―」[6]の中で指摘され、以下のように論考されている。

このように大量に見られる「非A亦非B」の句作りは、白居易固有の思考様式と堅く結びついているように思われるが、これは白居易が事物を対立の相において捉えず、本来対立しあう関係にあるものすら、その対立関係を解消させてしまう態度をあらわしているのではないだろうか。「非老亦非少」の句は老少という対立しあう要素のいずれかをよしとするのでなく、その両極の中間状態に価値を認めるのである。（中略）対立関係のない、中間状態に価値を認めるというのは、與えられた條件に自足する感情と結びついている。自足することによって対立は意味を失い、自分が置かれた状況が対立の中間に位置する最も望ましいものとみなされるのである。

川合氏は韓愈の詩にみられる「反抗」の文学、「自己戯画化」に比して、白居易詩の特徴として、中間状態を「自足」として自らの状態に歓びを見いだすその差異に着眼されてい

る。この白居易詩の特徴は良寛詩においても共通する部分をもつ特徴として考えられる。

【3】詩句としての類似

用語の類似に止まらず詩句として類似が看取される句を以下に掲げる。

（入・七二）

14少小抛筆硯　竊慕竺土仙　少小、筆硯を抛つ　竊に慕う竺土の仙

「自吟拙什因有所懐」詩に「未能抛筆硯、時作一篇詩」句がある。一句の意味するところには相反する部分もあるがその詩句には類似がみとめられる。

（入・七二）

14優游復優游復優游　薄言永今晨　優游復た優游　薄か言に今晨を永くせん

「夏日獨直寄蕭灑侍御」詩の第十三、十四句に「優、哉、復、游、哉、聊以終吾身」の詠出がみられる。

（入・七四）

62下有陳死人　古墓何纍々　下に陳死の人有り　古墓何ぞ累々たる

「寒食野望吟」詩の第三、四句に「風吹曠野紙銭飛　古、墓、累、々春草緑」が存する。また「続古詩十首」其二の第九、十句に「古、墓、何、代、人、　不知姓與名」の詠出がみられる。

（入・七四）

62人生百年後　誰不歸于茲（賢愚同歸）　人生百年ののち　賢愚同じくここに帰す

「浩歌行」詩に「賢、愚、貴、賤、同、歸、尽　北邙塚墓高嵯峨」句の詠出がある。

（入・七四）

62彷徨不忍去　凄其（悲）臨落暉　彷徨して去るに忍びず　凄其、落暉に対す

「読史五首」其一の第三、四句に「彷、徨、未、忍、決、　繞澤行悲吟」が存する。

（天・二六）

79此時持衣鉢（盂）　騰々入市廛　此の時鉢盂を持ち騰々として市廛に入る

「何處難忘酒七首」詩には七首全首の第七句に「此、時、無一盞」句が詠出される。其一には「此、時、無一盞　爭奈帝城春」と詠まれる。

（天・二六）

79放盂白石上　掛嚢青松枝　盂を放つ白石の上　嚢を掛くる青松の枝

「偶眠」詩の首句に「放、杯、書案上、　枕臂火爐前」が詠出される。

(天・三四)
102 鍾子兼延陵　一去不復歸　鍾子と延陵　ひとたび去って復た帰らず

「效陶潜體詩十六首」其一に「借問今何在　一、去、亦、不、還、」句が詠出される。

(天・三八)
113 無欲一切足　有求萬事窮　無欲一切足る　求むる有れば万事が窮す

「老熱」詩に「一飽百情足、一酣萬事休、」句がみられる。詩句の類似はみとめられるものの、「萬事窮」と「萬事休」の差異は着目すべき点である。

(天・四〇)
118 昨游都作夢　草堂深掩扉　昨游都べて夢と作し　草堂深く扉を掩う

「商山路有感」詩・頷聯に「此生都是夢、前事旋成空」の詠出がみられる。「草堂深掩扉」は153詩にも「草堂深掩竹溪東　千村万落絶人蹤」句が詠出される。「村居苦寒」詩に「願我當此日　草堂深掩門」句がみられる。

(地・四七)
132 唯知来朝新迎歲　不省雙鬢化為霜　(「和天華上人歲末被貽作」詩)
祇慣るる、来朝新たに歳を迎うるに　省みず、玄鬢の化して霜と為すを

「玄鬢」は黒い鬢づらを指し、「自詠」詩に「玄、鬢、化、爲、雪、未聞休得官」句(①)が詠出される。また「雙鬢」は双方の鬢づらを意味し、「官宅」詩・尾聯に「恋他官舎住　雙、鬢、白、如、雲、」句(②)がみられる。

(入・八四)
194 是非始在己　道即不如斯　是非は始より己に在り　道は即ち斯くの如くならず

「是非始在己」とする良寛詩に対し、「雑感」詩には「是、非、不、由、己、禍患安可防」句が存し、詩句としての酷似はみとめられるものの、一句の意味する思想はほぼ反対のものといえる。

三、受容の実態 ―類似の総和―

以上、個々の用例をみてきたが、良寛詩の一首全体を通して見た時、どのようにこれらが詠出されているか、例示として三首のみ掲げて再び振り返っておきたい。

(天・一五)
40 時(閒)上無量閣　支頤瞰雲烟　長松何落々(上有千章松)　清風萬古傳(蓄翠六月寒)
下(下有湧甘)有龍王泉　徹底淨無痕　誰能脱(脱金印)塵累(蕃魂興安禪)　此来照心顔

①「上、有萬仞山　下、有千丈水、」(「初入峡有感」詩):(第三句、第五句)／②・③－1「盡日観魚臨澗坐　有時随鹿上山行

誰能抛得人間事　来共騰々遇此生」（「元八郎中楊十二博士」詩）：（第五句、第七句）③－2「誰能脱放去　四散任所之」（「移家入新宅」詩）：（第七句）

（天・一六）

47行々投田舎　正是桑榆時　鳥鵲（雀）聚竹林　啾々相率飛
老農言歸来　見我如舊知　喚婦漉濁酒　摘藜（蔬）以蒸（供）之
相對此更酌　談笑一何奇　陶然共一酔　不問是與非

①「四十至五十　正是退閒時」（「白雲期」詩）：（第二句）／②「桑榆坐已暮　鐘漏行將曉」（「逸老」詩）：（第二句）／③－1「夜夢歸長安　見我故親友」（「夢與李七庾三十三同訪元九」詩）③－2「元九正獨坐　見我笑開口」（「夢與李七庾三十三同訪元九」詩）：（第六句）／④「布衾不周體　藜茹纔充腹」（「短歌行」詩）：（第八句）／⑤「合口便歸山　不問人間事」（「衰病無趣因吟所懐」詩）：（第十二句）

（八・七四）

62杖策獨行々　行到南山陲　松柏千齢外　竟日悲風吹
下有陳死人　古墓何纍々（累々）　昔使僮與僕　今有狐與狸
昔在高堂上　今空遺野外　人生百年後　誰不歸于茲（賢愚同歸）
彷徨不忍去　凄其（凄）至落暉（日）

①－1・②－1「下有無事人　竟日此幽尋」（「翫新庭樹因詠所懐」詩）：（第四句、第五句）②－2「下有白頭人　擘衣中夜起」（「酬集賢劉郎中對見寄兼懐元浙東」詩）：（第五句）②－3「下有獨立人　年来四十一」（「秋日」詩）：（第五句）①－2「西窗竹陰下　竟日有餘情」（「聽弾古淥水」詩）：（第四句）／③－1「風吹曠野紙銭飛　古墓累々春草緑」（「寒食野望吟」詩）：（第六句）③－2「古墓何代人　不知姓與名」（「続古詩十首」其二首）：（第六句）／④「賢愚貴賤同歸尽　北邙塚墓高嵯峨」（「浩歌行」詩）：（第十二句）／⑤「彷徨未忍決　繞澤行悲吟」（「読史五首」其一首）：（第十三句）

良寛詩と白居易詩間の類似の実態は、用語・句型・詩句レベルの個々の用例において差違を有し、これらの検討の結果、良寛詩は、一首の詩中に白居易詩をはじめとして、その他伝統的な古詩等の詩句を織り込んだ、いわば類似する詩句（或いは典拠を有する詩句）の総和ともいうべき形で成立していることが確認された。ではなぜ漢詩の中でも特に白居易詩に、これほど多く類似する詩句がみとめられたのか。

それについては白居易詩そのものの特徴と大きく関連があるように思われる。古来より「白俗」などの指摘とともに語られる白居易詩の特徴の一つはその平易さである。老婆に聞かせてみて、彼女が理解できるまで書き改めたという逸話はよく知られている。「表現されるべき対象の全体を何もかも表現しようとする態度、そのためにもたらされる浅薄、直截、平易、饒舌」[7]という特徴をもつ白居易詩は、表現しようとする対象を平易に、しかも明確な形で描写しようとする良寛の

詩作態度と共通するものであった。

しかしこれまでみてきた用例においても明らかであったように、詩句の類似は指摘できるものの、一句の意味する内容[8]は、双方の間には異なる思想、ある点では全く逆の思想を表現している句もいくつもみられた（14・113・194詩等）。つまり、表現する上での用語、型は借りながら、そこに展開される良寛自身の詩句は明らかな独自性をもって表現されていたのである。それは良寛の詩句が良寛自身の思想の表明だったからである。その場には良寛の思索の過程が展開されようとしていた。平易な言をもって、出来うる限り直截に饒舌に表現をする白居易詩の句を借り、良寛の思索の過程、思想が表現されていたのである。

その中には白居易詩に詠まれる思想と共通するものもみられた。「非～非～」（1詩他）表現において見てきた、白居易詩の中間状態に価値を認める「自足」の思想は良寛詩においても共通するものであったと考えられる。それゆえに良寛詩においても「非俗非沙門」などの句として直截に用いたのである。また良寛個人に特徴的な「騰々」や「任運」或いは「悠々」等の用語において多くの類似が指摘できたのもこれらの語が白居易詩の「自足」の思想と結びつくものだったからである。この思想においては双方は共通し、多くの類似が認められることになる。自らの思想を明らかに表現できるものであれば同様の句であろうがもはやそれが良寛自らの句となったのである。そこにおそらく良寛の躊躇は全く存在しなかったであろう。白居易詩を選んだわけではなく、自らの詩句を探し求めた結果が、平易で明解な白居易詩の詩句と類似するものとなった。その詩句の受容は意図されたものではなかったが、きわめて蓋然性の高い享受であったといえる。

おわりに

（天・一八）

55 異哉後世子　間居好作詩　我見る後生の子　群居して好んで詩を作す

題時命題意　凝心分體裁　題を命じて趣向を案じ　心を凝らして体裁を分かつ

典籍必有據　平仄不浪施　句法は必ず據ること有り　平仄は浪りに施さず

或勉去陣言　復故用熟辞　或は勉めて陣言を去り　復ことさらに新奇を逐う

似則太似矣　奈何脱體非　是は則ち太だ是なるも　奈何せん脱体に非ざるを[9]

（傍線、点線ともに筆者による）

良寛は、その漢詩観において、「新奇」を逐うことをよし

とせず、「陣言」（陳言）を用いることは厭わないと表明する。陣言（陳言）は古くさい言葉、陳腐な言語をいう。使い古された用語であっても、我が意を的確に表現するに足る用語、表現であれば、直截に自らの詩句として詠出する。良寛詩において一首の眼目は、自らの意・思想を語ることであり、これらの類似する詩句は、あくまでもその手段として詠出されていたからである。白居易詩に用いられる、表現力に富み、描写に優れた詩句、的確で平易な措辞が求められたのは必然ともいえた。その一方、良寛詩には禅語や仏語などを錯綜して織り込む難解な表現も多くみとめられる。良寛詩の解釈には、これらのあらゆる観点からみた詩語・詩句の分析・検討が必要であるが、中でも白居易詩は、今後、良寛詩との新たな接点を探る上で、是非とも取り上げられるべき作品群として位置づけされるものである。

注

(1) 例えば渡辺秀英編『良寛詩集』（昭和49木耳社）七九頁や谷川敏朗『校注良寛全詩集』（平成10春秋社）五〇一頁など。

(2) 自筆漢詩集『草堂詩集』はいわゆる天・地・人と呼ばれる三巻に分かれた詩群で構成されており、詩群間には類似した詩もみられる。内容は、「雑詩」と題された詩群百十首（天巻）、有題の詩群約六十八首（地巻）、「雑詩五十首」と題された詩群約五十首（人巻）で構成されている。

(3) 『良寛書蹟大系』（平成2教育書籍）は自筆書蹟と確認された作品群として現段階では決定版とされるものである。

(4) 『和漢朗詠集』は良寛の書簡中に借覧していた本書を返却する趣旨の文面がみられる（谷川敏朗『良寛の書簡集』昭63恒文社）。

(5) 松本　肇「白居易の散文」（『白居易の文学と人生Ⅱ（白居易研究講座第二巻）』平成5勉誠社）参照。

(6) 川合康三「韓愈と白居易―對立と融和―」（『中國文學報』第四十一冊）平成二年

(7) 川合康三「白俗の検討」（『白詩受容を繞る諸問題（白居易研究講座第五巻）』平6勉誠社）

(8) 白居易詩の詩句の訳出については、佐久節註解『白居易全詩集（続国訳漢文大成）』第一巻～第四巻（昭和53日本図書）を参照している。

(9) 「脱體非」については、筆者はここでは『碧巌録』や『正法眼蔵』にも「脱体仏性なり」など多く用いられる禅語「脱體」（悟道のありのまま）としてとらえたが原則的な漢詩の読み方として「體（の）非を脱せん」として読むべきとする指摘も存することを加えておく。

〔附記〕
本稿は和漢比較文学会第75回西部例会（於同志社女子大学）で口頭発表した内容に基づく。席上懇切な御教示を賜った先生方に深謝申し上げる。